

【様式1】1ページ目

幅広い知識と経験を有する地元大学教員との円滑な連携により、ソフトバレーボールの学習における、子ども達のかかわり合いの質や運動能力を効果的に高めることができた事例

学校名 海南市立大野小学校（和歌山県） 5年
全校児童数 246名（男子128名 女子118名）
種目等 ボール運動（ソフトバレーボール）
（本事例に係る問合せ先）
電話番号 073（482）3524
学校メールアドレス kocho@oono-sho.kainan.ed.jp

1 実践研究のねらい

- （1）幅広い知識と経験を有する地元和歌山大学林修教授の指導により、ソフトバレーボール学習の単元構成や授業展開等々、子ども達が効果的にかかわり合うための工夫の多面性を探る。
- （2）上記大学教員の指導により、児童の実態を把握し個や集団に応じた指導を行うことで、ソフトバレーボールを中心にボール運動に対する関心意欲と運動技能を高める。

2 実践研究の概要

- （1）課題：林教授との日程調整、また実践を重ねたことによる成果と課題の見極め（評価）、子ども同士のかかわり合いの重視と運動量の確保（授業展開の工夫）
- （2）期待される成果（仮説）：子ども同士がかかわり合う、その質の向上、またその時間と運動量の確保、指導と評価の一体化
- （3）単元の学習に入る前に、林教授作成の運動に関わるアンケートを実施し児童の実態を捉え、その教員のアドバイスの下、捉えた実態を活用してチーム編成やソフトバレーボールのルール
の工夫を行った。また毎時間の授業の振り返りカードなどからも児童の変容を捉えた。

○課題を解決するために実践した具体的な取組について

1 具体的な取組内容・方法、取組を進める上での工夫点等

（1）取組内容・方法

10月に3年生の体育授業を参観いただき、現教主任からの研究概要の説明も含めて本校の研究実践や児童の実態を知っていただき、子ども達のかかわり合いを重視しながらも十分な運動量を確保する授業づくりについて教えて頂く。その後その大学教員作成のアンケートを実施して児童の実態をよりよくとらえ、それを活用した実践を行う。ソフトバレーボールの学習では、特に子ども達が運動の楽しさとできる喜びを実感できるよう留意し、11月25日には市指定の研究発表会で授業公開、研究協議を行う。その教員には、そこでの指導助言者として、実践の成果と課題について児童の実態から明らかにしていただく。

（2）取組を進める上での工夫点

- ①運動に対する好意度などアンケートにより捉えた実態をもとにチーム編成を工夫することで、同様な活気のあるチーム編成と、均衡がとれ緊張感のある試合を数多く実現できた。
- ②2タッチ目（トスの前）ではキャッチしてもよいという実態に見合ったルールを設定したことで、ボールがつながったり3段攻撃が可能となったりして全員が試合を楽しめた。
- ③本校教職員が同じ授業を参観し、研究主任の説明を聞いた上で、林教授に指導していただくことで、その内容を具体的に理解し、実践面である程度実現していくことができた。

○児童生徒の安全を確保するため配慮（工夫）したこと

ソフトバレーボール用の移動式ネット、またビーチバレーボールを活用することで、体育館内に4コートとって運動量を確保するとともに、支柱での打撲やボールでの突き指に留意した。

○成果の意義と今後の課題

- 1 専門的な知識のある外部指導者の活用により、単元構成や授業展開、またボールやルール、学習カードを工夫したことで、子ども達が互いにかかわり合いながら運動技能を高める実践ができた。
- 2 アンケートの活用によって実態に即した学習計画、またグループ編成を行なったことで、児童が楽しくボール運動に関わるとともに、児童の変容や技能の上達を適切に評価することができた

○ 研究内容

【子ども同士のかかわり合い】

試合を振り返り、ポジションどりなどをチームで確認



【運動技能を高める学び】

下半身を使ってレシーブするなど、基本プレーを習得



【みんなで楽しむ掲示物の工夫】

声のかけ合い方や楽しむためのルールを全員で共有

<p>声のかけ合いながらゲームを楽しもう！</p>		<p>みんなが楽しくプレーするためのルールや手段を考えよう。</p>
<p>ナイスボイス</p> <p>☆友だちのよいプレーを認める声 「ナイス ナイス！」 「イェ アツク！」 「ナイス レシーブ！」 「ナイス サーブ！」 「ナイス ファイト！」</p> <p>☆ほげます声 「ドンマイ ドンマイ！」 「文 がんばろう！」 「おつかい！」 「がんばれ がんばれ！」</p> <p>☆アツクボイス 「がんばって！」 「がんばろう！」 「バット バット！」</p> <p>☆その他の声 「ごめん ごめん」</p>	<p>ナイスアクション</p> <p>☆よいプレーを認める動作 「拍手」 「ハタタチ」 「両手」 「サムスアップ」</p> <p>☆ほげます動作 「両手ぶんぶん」 「両手」 「両手ぶんぶん」 「拍手」 「ハタタチ」</p> <p>ナイスボイスとアクション</p> <p>☆内陣を組んで声かけ ☆コートの中を順番に回ってアクション ☆ハルビイをして「セッター！」</p>	<p>大野つ子 5年生 ソフトバレーボール ルール</p> <p>○ サーブは、アンダーハンドでサーブが相手よりやすいように打つ。 ○ サーブは、コート内のどこから打ってもよい。 ○ 3回までに返す。 ○ フォウハンドなし。 ○ 足で打つのは禁止。 ○ 1人続けて2回さわらない。 ○ 2回目はキャッチし、キャッチしたところから動かさないで返ける。 ○ 1回目、2回目にボールを返した場合は、そのまま返してもよい。 ○ タッチネットについては、なるべくさわらないようにする。 ○ サーブが入れなかった時、サーブをするチームがローテーション。 ○ ブロックしてもよい。 ○ ボールが相手コートに落ちるか、相手が入ったとき、1点。 ○ ゲームは、両側別で行う。 ○ 審判は、セトルジャッジ、ややこしいときは、神農(じやんけん)。 ○ 得点を入れたチームがサーブを打つ。 ○ 相手をつなさない。 ○ オンラインは、イン。</p>

【学習カードの効果的活用】

チーム内のかかわり合いや自分の活動の振り返り

<p>ソフトバレーボール</p> <p>レシーブをセッターにつなごう。</p> <p>名前 ()</p> <p>今日のめあて レシーブをセッターにつなごう。</p> <p>めあてを達成できましたか。 ◎ ○ △ どんなところ</p> <p>精一杯運動できましたか。 ◎ ○ △ 楽しく運動できましたか。 ◎ ○ △ 仲間と協力できましたか。 ◎ ○ △</p> <p>友だちのまねをしたいと思ったら(名前) ()</p> <p>次の時間の課題</p>	<p>ソフトバレーボール ふりかえりカード</p> <p>名前 ()</p> <p>今日のめあて レシーブをセッターにつなごう。</p> <p>めあてを達成できましたか。 ◎ ○ △ どんなところ</p> <p>精一杯運動できましたか。 ◎ ○ △ 楽しく運動できましたか。 ◎ ○ △ 仲間と協力できましたか。 ◎ ○ △</p> <p>友だちのまねをしたいと思ったら(名前) ()</p> <p>次の時間の課題</p>
---	---

【児童アンケートによる実践の検証】

実践の前後に同様のアンケートを実施し、結果を比較することで児童の変容、また成果と課題をとらえる

「ソフトバレーボール」の単元の学習前と学習後に、林教授の作成した児童アンケートを実施した結果の一部より

- ・ 7の結果からは、体育の時間に意欲的をもって取り組めたことが分かる。
- ・ 17からは、理論的にも納得しながら運動に親しめたことが分かる。
- ・ 19からは、グループや個人による振り返りを大切にしながら学習を進めた成果が出たと考えられる。
- ・ 20からは、運動の楽しさのできる喜びを、個人そしてチームで分かち合い、体育への関心の高まりがうかがえる。

質問内容	単元の	はい	いいえ	わからない
7 体育の時は自分から進んで汗を流し、体を鍛えようという気持ちになる。	前	14	6	13
	後	20	1	13
17 運動のやり方だけでなく、なぜそのようにするのがよいかというわけを学ぶことができる。	前	10	1	23
	後	24	1	9
19 体育の授業は中途半端でまとまりがない。	前	1	17	16
	後	1	24	9
20 体育の学習は、その場限りのものでいつまでも思い出に残るような事はない。	前	4	11	19
	後	2	19	13

【研究発表会開催による実践の検証】

大学教員を含む外部の先生方とともに、実際の授業における子どもの動きで、研究実践の成果と課題をとらえる

地元海南市教育委員会より体力向上の研究指定を受けており、平成28年11月25日、教育研究発表会を開催し、本実践(5年生の「ソフトバレーボール」)も授業を公開、その後研究協議、また林教授から指導講評をいただいた。協議の中江は、子ども達のかかわりの良さやボールに対する積極性などを評価いただいた。また、大学教員からは授業中のある試合において、99回のパス中31回、約3割アンダーハンドパスができていた事実から、数を数えることでもレシーブにおける子どもの実態を把握することができることを教えていただいた。また、3段攻撃を意識した時、セッターがとりやすいボールについて考えることで、レシーブの高さをどうすればよいか考えられることなど、内容がつながる指導、系統性のある単元計画、授業構成の大切さなどについても改めてご指導いただいた。来年度も林教授には継続してご指導を仰ぎ、全国学体研ではさらなる研究実践の深まりを、かかわりの質の高さなど子どもの活動する姿で示したい。